

日本フィルとの不思議なご縁

福島県三春町立岩江小学校長 遠藤俊一

私が勤務する学校のある三春町には、多くの方々が避難されていた。避難所となった体育館や公共施設での生活は、日常とは一変しそれはそれは筆舌に尽くしがたい。子どもたちも着の身着のままの避難のため、ランドセル、教科書、学用品など一切ない中での避難所からの慣れない通学。そんな中、日フィルのカルテットが避難所で演奏をしてくださった。そして学校でも演奏してくださることに。野外での活動が制限されていた中、子どもたちにとっては願ってもない突然のプレゼント。当時、富岡町、葛尾村からは多くの子どもたちや先生方が避難先の学校に通い、通い慣れた学校を離れざるを得ない子どもたちが避難先の学校の校歌を歌わなければならないという複雑かつ困難な状況にあった。いつか本来の学校に戻れる日を心の中で強く願ってほしいという私の願いと、避難している子どもたちにもそれぞれの学校の校歌があるという現状を在校生にも知ってほしいという願いを込めて、4つの学校の校歌を演奏してほしい旨を願い出たのだ。そしていよいよ当日。体育館には、4校の子どもたちをはじめ、保護者、町内外の避難所からかけつけてくれた方々の姿が。初めて聴く弦楽四重奏による校歌の演奏。子ども時代に歌った校歌が流れると目頭を押さえるお年寄りの姿も。澄んだ音色が、懐かしさ、寂しさ、悔しさと複雑に絡み合いながら、一人一人の心の奥底に深く染み入ったことは言うまでもない。これが日フィルの皆さんとの不思議な縁の始まりになるなど、この時は知る由もない。

2014年4月、私が初めて校長として赴任した学校が、福島第一原発から20km圏内にあるK小学校。子どもたちの半分以上が避難しているため、同じような境遇にある4つの小学校が市内の仮設のプレハブ校舎で肩を寄せ合い教育活動を行っていた。仮設住宅や借り上げ住宅からスクールバスで通ってくる子どもたちは震災を忘れたかのように元気いっぱい。しかし、時々見せる寂しそうな仕草や目が、決して忘れてはいけないことを十分に物語っていた。私に「音楽の力」で子どもたちを少しでも勇気づけたいという思いが湧き上がってきた。いてもたってもいられず日フィルへ電話する。突然の電話にも関わらずうれしい返事をいただき、日本フィルとのご縁が続く。日フィルの皆さんが震災以降、同市の小学校や中学校へ、演奏やクリニックに来てくださっていたことをこのとき初めて知る。色鮮やかな映像をバックに演奏とお話による「動物の謝肉祭」。そして、演奏に合わせて参加者全員で歌った「ビリーブ」「ふるさと」。スクリーンに映し出された子どもたちの生き生きとした表情、ふるさとの風景。音楽の力がここでも顔を出す。

2年後、三春町に戻った私が勤務したのが、震災後多くの避難している子どもたちを受け入れていた学校。ここでも日本フィルの皆さんが私の願いを叶えてくださった。子どもたちと音楽をなんとかして繋ぎたい、そして勇気づけたいという思いが湧き上がるといつもそこには日フィルの皆さんが。そしてゴージャスな「音楽の力」で応援してくださる。演奏に合わせて身体を動かす子、食い入るように演奏に聴き入る子、静かに流れる小川のような演奏についてウトウトしてしまう子。そんな子どもたちの表情が私は大好きである。演奏と同時にその音楽の裏にある様々な思いが一人一人の子どもたちの心に響き渡る。

日フィルの皆さんとの出会いは、音楽は「関わるもの」そして「紡ぐもの」という新しい思いをいつも私の心に起こさせてくれる。感謝してもしきれない。私のアイデンティティ、そして、新たな始まりの第一歩。

日本フィル「被災地に音楽を」は、三菱UFJニコス株式会社の支援を得て行っています。

日本フィル「被災地に音楽を」

訪問コンサート レポート 第43号

被災地支援の訪問演奏は、2011年4月からはじまり、2019年1月現在、通算263回となりました。



訪問地 福島県

2018年10月2日(火) 双葉郡富岡町 会場:富岡町文化交流センター 学びの森
 10月3日(水) 田村郡三春町 会場:御木沢小学校 体育館
 双葉郡葛尾村 会場:葛尾小学校・中学校 体育館
 10月4日(木) 田村郡三春町 会場:三春交流館まほら

訪問メンバー

ヴァイオリン 九鬼明子 / 豊田早織
 ヴィオラ 高橋智史
 チェロ 山田智樹

2011年の6月を始めとし、三春町にはこれまで4度訪れました。5回目を迎えた今回は、三春町の小学生と地域の方々、葛尾村と富岡町では小中学生、そして地域の方々に弦楽四重奏で音楽をお届けいたしました。各会場のご担当の先生方に希望を尋ね、メンバーが趣向を凝らしてプログラムを組んでいます。また、これらの学校と日本フィルとの間を取り持ってくださいました三春町立岩江小学校の遠藤校長先生に今回の特別寄稿をいただきました。

<富岡町> 10月2日(火)午後 富岡町学びの森



震災後、初めて富岡町を訪れました。会場となった富岡町立文化交流センター学びの森は町役場に隣接する複合施設で、2017年4月に再開。富岡町の小学校2校、中学校2校が富岡町立富岡小中学校となり、2018年4月に再開しました。現在は20名前後の児童生徒が在籍しているそうです。

もともと演奏を予定していた学びの森小ホール

の扉の向こう側に、テラスのような野外堂がありました。ホールのご担当者によって扉が開けられると、目の前に豊かな木々と木材のステージがあり、とても開放的で気持ちのいい空間。試しにチェロの山田が音を出してみるとこれがよく響く。この日は天気もよく、メンバーで相談し、今回は急きよこの野外堂で演奏しました。

富岡町の石井教育長によると、2018年10月現在700名程の町民がふるさとに戻ってきており、その半分以上は高齢者です。「子どもたちに、ぜひプロとしてのカッコいい姿を見せてください」との話がありました。全員で「もみじ」の合唱や、子ども達の「ピリープ」の歌声が響くと、涙される方もいらっしゃいました。この日の「もみじ」の歌声は忘れられない時間となりました。

<葛尾村> 10月3日(水)午後 葛尾村立葛尾小中学校

葛尾村は三春町と富岡町の間くらいに位置します。震災後、富岡町と同様に三春町に分校が開講しましたが、2018年3月に閉校となり、同年4月に葛尾村にて小学校と中学校が同じ校舎で再開しました。小学校中学校合わせて児童生徒は17名です(2018年10月時点)。学校のすぐ近くには、葛尾村復興交流館が、地域の方々の交流の場、また情報収集の場として拠点として同年6月にオープンしたそうです。



コンサートでは全員合唱のほか、指揮者体験では3名の児童生徒に指揮してもらい、「緊張したけれど楽しかったです」と感想をいただきました。

校舎には様々な多目的室があり、学校を核とし地域の方が集まる場を目指しているそうです。

<三春町> 10月3日(水)午前 御木沢小学校

当初は三春町立御木沢小学校の児童と近隣の復興住宅の方を対象にしていたのですが、御木沢小学校の提案で、富岡小学校の三春分校の児童生徒と合同で演奏を聴いていただくこととなりました。このコンサートをきっかけに、今後富岡小三春分校と御木沢小の2校は授業においても交流をしていくそうです。この活動を通して学校間で子どもたちの交流が生まれるのは嬉しいかぎりです。

指揮者体験ではそれぞれの学校から体験いただき盛り上がり、全員合唱もとても元気な歌声が体育館いっぱい響きわたりました。また、楽器紹介のあとの質問コーナーでは、「チェロは重いのですか」など、楽器についての質問がたくさん出て、それに答えるように楽員も近くまで楽器を見せたり触ってもらったりする場面もありました。



指揮者体験



<三春町> 10月4日(木) 三春交流館まほら

三春町には、400席ほどの室内楽専門ホールがあり、日本フィルはこれまでに3回訪れています。小学校音楽鑑賞教室の一環として、昨年はサン＝サーンスの《動物の謝肉祭》を、今回はカルテットでのコンサートを開催しました。恒例の「ピリープ」、そして今回初めて取り組んだ乱太郎「世界が一つになるまで」の全員合唱は、とても元気の良い歌声がホールに響きました。音楽の各声部とアンサンブルに注目してもらう「曲当てクイズ」では、低音のチェロ1本から始まり、ヴィオラが加わり、セカンドヴァイオリン、そして最後にファーストヴァイオリンが加わっていきます。楽器が増えるごとに曲の輪郭が浮き上がっていくもので、児童が勢い良く答えていました。



《ピリープ》を歌う様子

